博士論文（要約）

近代日本における中上流階級女子のたしなみ像

—19 世紀末から 20 世紀初頭東京の音楽文化に着目して—

歌川　光一

本研究は、19 世紀末から 20 世紀初頭東京の音楽文化に着目して、近代日本における中上流階級女子のたしなみ像を明らかにすることで、同時期に理想的女子像をめぐる「伝統／近代」が共存し得た社会的背景の解明を試みるものである。

第 1 章においては、問題の所在を明らかにした。

近年の女子教育史研究では、婚姻後の理想像である「良妻賢母」の研究が掬い取れてこなかった、「女学生」（本田 1990、吉田 2000、稲垣 2007）、「少女」（渡部 2007、今田 2007）といった女子の実態や理想的像をめぐる研究が蓄積されつつある。これらの一連の研究は、戦前期における女性の年齢による規範の異同や、学校空間の特異性に着目し、その過程で、女子同士の「エス」のような同性思慕的な関係、雑誌を介したヴァーチャルなネットワークの形成、女学生言葉などのサブカルチャーといった、女学生の生徒文化や、学校文化と大衆文化の接触状況を多様に描き出した点で示唆が大きい。

ただし、従来の女子教育史研究では、明治期から大正期にかけて中上流階級の理想的女子像をめぐって、同階層の男子像には生じなかった「伝統／近代」の共存がいかに可能になったのか、という点については十分明らかにしてこなかった。

本研究は、この課題を、東京における中上流階級女子の「音楽のたしなみ」の実態と表象を対象として考察するものである。分析の視角として、音楽の「文化定義のジェンダー化」過程に着目し、楽器の種類（邦楽／洋楽）ごとにイメージの異同を検討する。また、資料としては、同時期の多様なジェンダー・アイデンティティの確立に影響を与えた女性雑誌（婦人雑誌・少女雑誌）を中心に用い、その音楽をたしなむ必要性を通時的に読み取ることとした。また、職業案内書、礼儀作法書といった資料も合わせて用いることで、「たしなみ」の度合いやその披露の範囲を読み取ることとした。

第 2 章において、まず、東京における女子の「音楽のたしなみ」の前史と概要（近世後期から昭和戦前期まで）を、音楽史、芸能史等の二次資料および、学校沿革史・校友会雑誌等の一次資料から整理した。箏、三味線をたしなむ文化は、近世後期にそれらが「遊芸」化する過程で発生し、女子については、町人層を中心に武家奉公のための稽古事文化が定着した。明治期の洋楽文化の移入後、高等女学校では音楽教育が重視され、20 世紀初頭から洋楽をたしなむ女子が登場し始める一方、明治維新後に威信が低くなった箏、三味線（特に長唄）をたしなむ文化も、昭和戦前期まで継続したことを明らかにした。

第 3 章においては、良妻賢母像と「音楽のたしなみ」の関係を 19 世紀末から大正期における婦人雑誌および家政・修養書の分析から明らかにした。箏については、明治 20～30 年代前半、西洋楽器と共に「一家団欒」の手段、もしくは主婦役割としてその演奏が期待されつつも、娘を溺愛する親を連想させ、「子どもへの教育意識」にも欠けるものとして論じられるが、日露戦以後、階層を越えた「一家団欒」創出に寄与し、妻が夫を慰労する「趣味」、もしくは婦人向けの職業として着目される。また、大正期に入り新中間層の拡大が始まると、一家団欒のみならず、女性が不遇に備える職業として、また、子ども、とりわけ娘の趣味涵養の手段として紹介される。三味線については、当初、未就学の娘や芸娼妓を連想

させる近世の遺物として論じられたが、日露戦争期以後の生活再編の動向を背景に、下層階層でも入手可能な楽器、また、妻が夫を慰労する手段として採り上げられ、新中間層の拡大期に当たる大正前期には、母親の立場から子どもの稽古事として容認される。このように、「家庭音楽」概念を鍵として、女子の「音楽のたしなみ」の社会的位置づけが相対的に向上し、邦楽のたしなみも再定位されていったことを明らかにした。

第 4 章においては、女子の観点から日露戦争後から大正期までの「音楽のたしなみ」像を検討した。「家の娘」としてグラフ誌等に登場した「令嬢」のプロフィールやそのあり方を論じた記事に着目すると、「趣味」は Taste として涵養するのみならず、Hobby として量を拡大する対象へと変質している。この過程で、趣味が洋楽一辺倒が望ましくないと考えられるようになったため、戦略的に長唄等の邦楽のたしなみが強調されることとなる。それに対し、少女雑誌上の絵双六やグラビアに登場した「少女」は、ピアノをはじめとする洋楽を通じた家庭音楽を天真爛漫に実現する、もしくは音楽家になる夢を抱く存在として表現された。このように、同年代の女子であっても、婚姻を控えた「令嬢」としてのジェンダー・アイデンティティと、女学校や少女雑誌において展開された「少女」としてのそれでは、求められる「音楽のたしなみ」像の和洋が異なっていたことを明らかにした。

第 5 章では、社会的に求められる「音楽のたしなみ」の程度について検討するために、日露戦争後から大正期における女子職業論における音楽のたしなみ像を検討した。まず、ピアノ、ヴァイオリン、声楽といった洋楽の女性プロについて、それらは女子の「成功」像の一つだったが、あくまで達成困難であるがゆえの憧れの対象であった。一線を越えて職業音楽家として活躍した戦前期の洋楽の女性音楽家は、経済的に男性を凌ぐことがあり、社会的に警戒されたことも背景となっていた。一方、箏や三味線といった邦楽の場合、その教習が家元制度に基づいて行われていたために、洋楽ほどには高女卒や音大卒の学歴も必要なく、町の女師匠になることは、努力次第で適うこととして紹介された。しかし、それと同時に、職業としての邦楽の「女師匠」は、夫なくして三味線で身を立てる女性が芸娼妓を連想させる、夫なくして箏で身を立てる女性が盲者を連想させる、というように当時としては「家庭」から外れた苦労人を連想させたため、憧れの対象とはされなかった。このように、ピアノを始めとする洋楽のたしなみを通じた女性音楽家、箏や三味線のたしなみを通じた女師匠の途いずれもが、中上流階級女子にとっての現実的な職業的選択肢にはなりづらかったことを明らかにした。

第 6 章においては、「音楽のたしなみ」像を披露の観点から検討するために、19 世紀末から大正期における礼儀作法書の分析を行った。同時期の礼法書の中で、ピアノのたしなみを通じた交際・社交に関しては、大正期末の 1 件のみしか該当しなかった。既述のように、同時期における家庭音楽論では、ピアノを始めとする西洋音楽のたしなみを通じた一家団欒が目指されていたが、礼法書の記述状況を見る限り、身体的なレベルでは、同時期は西洋音楽を通じた交際・社交のあり方の模索期にあったと考えられる。また、家庭音楽論で謳われた家庭音楽会の開催等も、日本式を基調とする礼法書には登場せず、あくまで欧米

式礼法書にその紹介がなされていた。このように、日本においては、音楽のたしなみを通じた、家族も含む公私の領域の中間領域による「市民音楽愛好家」のあり方が議論されず、忘却されていった可能性が示唆された。

第 7 章においては、本研究の知見と意義を女子教育史の観点から再整理した。

東京では 20 世紀初頭に、ピアノを始めとする洋楽をたしなむことが可能になり始め、欧米にならう形で、家庭における女性のピアノの披露が理想化された。この家庭音楽論の進展の中で、日本の家庭における現実的な音楽実践を促すために、箏や三味線のたしなみも、「趣味（Taste）」として容認されるようになる。この「趣味」それ自体は、必ずしも女性のみに向けられて用いられた概念ではなかったが、女性は、家庭における夫の慰籍や子どもの情操教育のために、「趣味の披露」を求められたため、女性にとって必要な「趣味」は、必然的に Hobby に近づくこととなる。

この点は、女子にはより顕著となった。当時、女子にとっては、「結婚準備」の意味が曖昧であったことも背景となり、箏、三味線といった伝統的なたしなみから、ピアノのような近代的なたしなみまでもが、女子の修養のような形で「娘時代の教養」に嵌りこんでいった。ただし、一つの趣味に熱中する（Taste を深める結果、Hobby の一つとなる）ことは、まだ見ぬ夫やその家族との不仲を招いたり、結婚相手の選択肢を狭めるとされ、また、熱中の結果、趣味が職業につながることも良妻賢母像から外れると考えられるため、結果として、女子には Hobby の量的確保という修養が求められることとなった。この過程において、女子のたしなみとして箏、三味線が駆逐される論理は徹底せず、女性に求められる音楽のたしなみ像は和洋折衷化していった。

一方、女学校と少女雑誌に守られた「少女」像の中においては、ピアノをはじめとする洋楽のたしなみや、女性音楽家への夢が温存されることとなる。

なお、同時期には、家庭音楽論が理想化した、音楽のたしなみを家庭内やホームパーティーで披露する習慣も、そのイメージが普及せず、女子のたしなみはあくまで修養の対象と位置づけられたことが予想される。

このように、女子のたしなみの実態のみに着目するのではなく、19 世紀末から 20 世紀初頭に台頭し始めた多様なジェンダー・アイデンティティとの関係性から音楽のたしなみ像を検討することで、各地域の風習や家の方針の下、個々の稽古事として行われていた中上流階級女子のたしなみが、近代化の過程で、国民国家を支える「家庭」における「趣味」として位置づけなおされ、なおかつその「趣味」が、和洋折衷化と修養化を果たした論理を把握することができた。

音楽のたしなみを事例とした本研究の過程から、戦前期の理想的女子像において「伝統／近代」が両存し得た背景として、女性の教養が、押し並べて「家庭」に資する「趣味」として解釈し直され、なおかつ女子にとって Hobby としての「趣味」の量的拡大が重要性を増した結果、理想的女子像をめぐる「伝統／近代」という枠組み自体が弱まっていった可能性を指摘できる。